大学生の家族イメージ

片　平　眞　理

大学生の家族イメージを，亀口の開発したＦＩＴ（家族イメージ法）を用いて調べた。まず，現在の自分の家族についてのイメージを描くよう求め，その後でこうなったらいいと思う家族についてのイメージを描くよう求めた。結果は，(1)現実の家族，理想の家族とも父親を最も力のある者としてイメージしていた。(2)家族間の距離については，現実の家族では父子間の距離を最も遠いとイメージしていたが，理想の家族では父子間距離と母子間距離がほぼ等しく，父母間の距離が短くイメージされていた。(3)家族の結びつきは，現実の家族では，父子間が父母間，母子間に比べて弱かったが，理想の家族では結びつきの強さに差はなかった。(4)現実の家族，理想の家族とも父母を上に配置し，自己を下に配置している者が大半であった。

キーワード：家族イメージ法，大学生，現実の家族，理想の家族

Ⅰ．はじめに

家族の変貌や危機が叫ばれるようになって久しい。３世代家族の減少や、共働き家族の増加，消費社会，地域社会のつながりの希薄化などさまざまな原因を巡っての議論や解説も多くなされてきている。

犯罪も低年齢化し，神戸の『酒鬼薔薇』事件では，事件の異常性や中学生の起こした事件ということでセンセーショナルに報じられた。2003年には長崎で中学１年生が，2004年には佐世保で小学生が殺人事件を起こした。このような事件が起こるたびに，親の養育態度や夫婦関係などが取沙汰される。しかし，斎藤[8]が1970年代後半以降，「普通の家庭に育った」「普通の子による」「予測困難で突発的な」犯罪が出現してきたと述べているように，親の養育態度や夫婦関係のみに原因を帰すだけでは問題の解決には程遠い。

ところで，「普通の家庭」とは，どのような家庭を言うのであろうか。二十年以上，主として不登校児の家族への心理的援助を行ってきた亀口[2]は，「不登校家族が抱える心理的な問題は，けっして彼らに特有なものではなく，平均的な家

族にも共通した構造をもっているように思われてならない」と述べている。

個々の家族メンバーが自分の家族についてどのような視覚的イメージを抱いているかを明らかにするために，亀口[1]は1980年代半ばから家族イメージ法の開発に取り組んできて，2003年には，ＦＩＴ（Family Image Test）[3]として，現在の形のものが完成している。ＦＩＴは，家族アセスメント法として用いられるだけでなく，臨床場面における家族援助にも用いられている[5)7)]。

家族イメージ法を用いて，非臨床群における家族イメージの特徴を明らかにした研究としては，大下・亀口[6]による中学２年生を対象とした研究や，新藤・相模・田中[10]による小学生の研究がある。

本研究では，①大学生を対象として家族イメージ法を集団実施して，大学生が家族に対してもつイメージについて明らかにする。②現実の家族イメージに対してこうなればいいと思う家族のイメージ（望ましい家族のイメージ）について明らかにし，両者を比較する。また，家族からの独立の準備の時期である大学生の家族イメージと，新藤ら[10]による小学生の家族イメージを比較検討する。

Ⅱ．方　法

家族イメージ法[注]を集団実施した。家族イメージ法は，15cm×15cm の正方形の枠内に家族メンバーそれぞれに見立てた直径1.5cm のシールを配置していく。シールは色の濃さが黒から白までの５段階に分けられており，色の濃淡はパワーの違いを表している。シールには矢印がついており，家族メンバーの向きを表す。シールを貼り終えたら，それぞれのシールが家族の誰を表しているかを記入する。そのあと家族の結びつきについて，━━━━強い結びつきがある，────結びつきがある，---------よくわからない，の３種の線でシールとシールの間を結ぶ（図１参照）。

最初に，「現在のあなたの家族についてもっているイメージを，シールで表現してください」と教示し，家族イメージ法の実施方法を説明したのち集団で実施した。全員が終えたところで，２枚目のＦＩＴを配布して，「さっきと同じ要領で，今度はあなたが，自分の家族についてこんな家族だったらいいと思う家族のイメージを描いてください」と教示して実施した。

対象は，大学生60名で，そのうち父母いずれかのいない家族と中国人留学生を除いた，50名（平均年齢20.5歳，男子13名，女子37名）について分析した。また，男子の対象者が少なかったので，男女間の比較は行わなかった。

実施時期は，2003年10月であった。

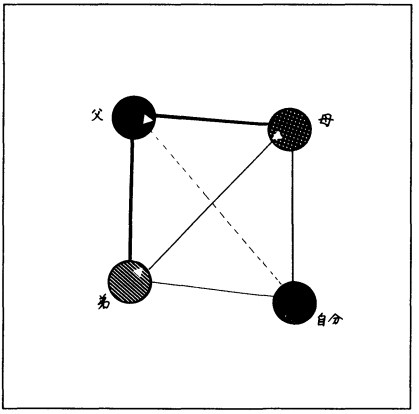

図１　家族イメージ法の模式図

Ⅲ．結果と考察

(1)　パワーイメージ

黒から白までの濃淡の異なるシールによって，パワーの違いを示す。黒を５として，以下濃度がうすくなるにつれて４，３，２，１と点数化して，平均値と標準偏差を求めた。

現在の家族についてのイメージ（以下，現実の家族と表す）についての結果を表１に示す。父親のパワーについては，１番強いシール（５）を選んだ者が52％で最も多く，ついで２番目のシール（４）が28％だった。母親では，２番目に強いシールを選んだ者が38％で最も多く，ついで１番目のシールが36％であった。自己については，３番目のシールを選んだ者が42％で最も多く，ついで４番目のシールが20％であった。

こうなったらいいと思う家族についてのイメージ（以下，理想の家族と表す）についての結果を表２に示す。父親のパワーについては，１番強いシールを選んだ者が56％で最も多く，ついで２番目のシールが26％だった。母親では，２番目に強いシールを選んだ者が54％で最も多く，ついで１番目のシールが28％であっ

表１． 現実の家族のパワーイメージ　（N＝50）　（　）内は％

	5（黒）	4	3	2	1（白）	平均	SD	最頻値
父親のパワー	26（52）	14（28）	5（10）	3（6）	2（4）	4.18	1.10	5
母親のパワー	18（36）	19（38）	9（18）	4（8）	0（0）	4.02	0.94	4
自己のパワー	7（14）	7（14）	21（42）	10（20）	5（10）	3.02	1.15	3

表２． 理想の家族のパワーイメージ　（N＝50）　（　）内は％

	5（黒）	4	3	2	1（白）	平均	SD	最頻値
父親のパワー	28（56）	13（26）	6（12）	1（2）	2（4）	4.28	1.03	5
母親のパワー	14（28）	27（54）	9（18）	0（0）	0（0）	4.10	0.68	4
自己のパワー	7（14）	11（22）	24（48）	6（12）	2（4）	3.30	0.99	3

た。自己については，３番目のシールを選んだ者が48％で最も多く，ついで２番目のシールが22％であった。

現実の家族，理想の家族とも，もっともパワーの強いのは，父親で，ついで母親，自己は３者のなかではもっともパワーが弱かった。現実の家族の父，母，自己，理想の家族の父，母，自己のパワーについて分散分析を行った結果，有意差（$F=13.70$，$p<0.05$）がみられた。多重比較の結果有意差のあったのは，現実の家族の父と自己，現実の家族の母と自己，現実の家族の父と理想の家族の自己，現実の家族の母と理想の家族の自己，理想の家族の父と自己，理想の家族の母と自己であった。現実の家族，理想の家族とも，父親のパワーと母親のパワーの間には有意差はなかった。

小学生では親をモデルとしてパワーのある存在とみなしているが，成長するにつれ，親のパワーは低下すると考えられる。本研究の結果は，新藤ら[10]の小学生の結果と比較して，親のパワーは若干低いものの，柴崎の大学生についての結果[2)による]に比べると親のパワーが強く，より小学生の結果に近いものであった。新藤らによると，小学生の父親に対するパワーイメージや，母親に対するパワーイメージには性差がみられなかったが，自己イメージについては，女子のほうが男子よりも低かった。本研究の対象者に女子が多かったことで，自己のパワーの低さは説明できるが，親パワーの強さについては，大学生になっても親を権威ある者，強い者と見ているといえる。

理想の家族については，現実よりも父，母，自己ともパワーが強い方向に変化しているということは，家族成員それぞれがパワーの強い生き生きとした家族をより好ましい家族とみていると考えられる。

(2) 距離イメージ

距離イメージについては，シールの中心から中心までを実測した。現実の家族については表３に示す。父母間の距離の平均値は5.6cm，平均値の95％の信頼区間5.1cm～6.1cm，父子間距離の平均値は6.7cm，95％の信頼区間は6.1～7.3cm，母子間距離の平均値は6.0cm，95％の信頼区間は5.5cm～6.6cmであった。

理想の家族については表４に示す。父母間の距離の平均値は5.3cm，平均値の95％の信頼区間4.8cm～5.8cm，父子間距離の平均値は6.4cm，95％の信頼区間は5.7～7.1cm，母子間距離の平均値は6.6cm，95％の信頼区間は5.9cm～7.2cm であった。

現実の家族では，父母間の距離イメージが最も短く，父子間の距離イメージが

表3．現実の家族の距離イメージ
（距離 cm）

	距離	SD
父母間の距離	5.6	1.83
父子間の距離	6.7	2.16
母子間の距離	6.0	1.94

表4．理想の家族の距離イメージ
（距離 cm）

	距離	SD
父母間の距離	5.3	1.78
父子間の距離	6.4	2.33
母子間の距離	6.6	2.34

最も長かった。理想の家族では，父母間の距離が最も短く，父子間の距離と父母間の距離はほぼ等しかった。

現実の家族の父母間，父子間，母子間，理想の家族の父母間，父子間，母子間の距離イメージについて分散分析を行ったところ有意差がみられた（$F=3.57$, $p<0.05$）。多重比較の結果，有意差がみられたのは，現実の家族の父子間と理想の家族の父母間，理想の家族の父母間と母子間であった。

現実の家族では，父子間距離が父母間距離や母子間距離に比べて，長い傾向があったが，父母間距離が最も短かったということから，母子密着というよりは，パワーの強い，権威のある者から距離を置こうとしていると考えられる。理想のイメージとしては，夫婦の距離がより近づき，自己はいずれの親からも独立していこうとする傾向がみられる。

(3) 家族の結びつきの強さ

家族間の結びつきの強さを，強い結びつきがある場合を3，結びつきがある場合を2，わからない場合を1として平均値を算出した。

現実の家族の結果を表5に示す。父母間の結びつきは，強い結びつきがあるが66％で最も多かった。父子間では，結びつきがあるが60％で最も多かった。母子間では，強い結びつきがあるが60％で最も多かった。

理想の家族の結果を表6に示す。父母間では強い結びつきがあるが74％で最も多かった。父子間でも，強い結びつきがあるが52％で最も多かった。母子間でも，強い結びつきがあるが60％で最も多かった。

現実の家族の父母間，父子間，母子間，理想の家族の父母間，父子間，母子間の結びつきについて分散分析を行ったところ有意差がみられた（$F=5.92$, $p<0.05$）。多重比較の結果，有差のあったのは，現実の家族の父母間の結びつきと父子間，現実の家族の父子間と母子間，現実の父子間と理想の父母間，現実の父子間と理想の父子間，現実の父子間と理想の母子間であった。

表5．現実の家族の結びつきの強さ　(N＝50)　　( )内は%

	3	2	1	平均	SD	最頻値
父母間の結びつき	33(66)	10(20)	7(14)	2.52	0.74	3
父子間の結びつき	11(22)	30(60)	9(18)	2.04	0.64	2
母子間の結びつき	30(60)	17(34)	3(6)	2.54	0.61	3

表6．理想の家族の結びつきの強さ　(N＝50)　　( )内は%

	3	2	1	平均	SD	最頻値
父母間の結びつき	37(74)	11(22)	2(4)	2.70	0.54	3
父子間の結びつき	26(52)	20(40)	4(8)	2.44	0.64	3
母子間の結びつき	30(60)	15(30)	5(10)	2.50	0.68	3

現実の父子間の結びつきは，父母間，母子間の結びつきよりも弱く，距離も遠いとイメージされていたことを考えると，家族のなかで父親は子どもからパワーのある存在ではあると見なされているが，心理的には母親よりも関係が薄いとイメージされていた。

(4) 父母の位置関係

父母の位置関係については表7に示す。現実の家族，理想の家族とも，父母を横並びにして，父親を左に配置した者が最も多かった。従来の研究における，最も強いとイメージされた者が左上に配置されるという結果と一致した。現実の家族イメージと理想の家族イメージと異なる点は，現実の家族で母親を強いとイメージした者が，理想としては父親により強さを求めたというところであった。このことは，理想の家族で母親を左とした者や，両親を縦に配置して母親を上にした者が減少したことからわかる。

表7．父母の位置関係　(N＝50)　　( )内は%

	横（父左）	横（母左）	縦（父上）	縦（母上）	斜め
現実の家族	23(46.0)	9(18.0)	1(2.0)	6(12.0)	11(22.0)
理想の家族	24(48.0)	6(12.0)	7(14.0)	2(4.0)	11(22.0)

(5)　父母の向き

父母の向きについては，表８に示す。現実の家族，理想の家族とも向き合いが最も多かったが，理想の家族のほうがさらに向き合いが増加した。大学生がアイデンティティを確立し，自立していくためには両親とのよい関係が必要である。臨床場面で見られる事例で，子どもの自立が妨げられている家族に，子どもが母親の愚痴の聞き役である場合がある。両親は子どもの自立後は，夫婦の関係を再構築することが一つの課題といえるが，子どもの側からも，両親に対して向き合うことを求めていると考えられる。本調査では，表９に示すように両親を上に配置した者が最も多く，世代境界は引かれていると考えられるが，表５に示したように，母子間の結びつきが強いことから，母子間の結びつきを緩め，父母間の結びつきを強めるためにも，父母間がより向き合うことを望ましいと考えているのであろう。

表８　父母の向き　　N=（50）　　（　）内は％

	向き合い	平　行	直　角	相　反
現実の家族	28(56.0)	11(22.0)	8(16.0)	3(6.0)
理想の家族	35(70.0)	9(18.0)	5(10.0)	1(2.0)

(6)　父母と自己の位置関係

父母のシールを結んだ線に対して，自己が上か，同じか下かについて表９に示す。現実の家族，理想の家族とも自己を父母よりも下に配置した者が最も多かった。柴崎ら[9]は，「上ということは偉い・強いといった意味合いがあると思われる」と述べているが，このことは自己よりも，父親や母親を濃いシールで表していることとも一致する。

表９　父母との位置関係　（度数：（　）は％）　N=50

	自己が上	同　じ	自己が下
現実の家族	10(20.0)	0(0.0)	40(80.0)
理想の家族	6(12.0)	4(8.0)	40(80.0)

(7)　父母に対する向き

父母のシールを結んだ線に対する自己の向きを示したのが表10である。現実の家族，理想の家族とも向き合いが最も多かった。現実の家族よりも理想の家族に

おいて，向き合いが増加している。これから自分の家族を作っていく準備段階にある大学生は，家族の外に関心が向いていくが，家族としての単位を考えると，家族としての結びつきや関心をもつことが好ましいと考えていると思われる。

表10　父母軸への向き　（度数：（　）は％）　N=50

	向き合い	平　行	相　反
現実の家族	34(68.0)	14(28.0)	2(4.0)
理想の家族	38(76.0)	11(22.0)	1(2.0)

(8)　まとめ

以上，パワーイメージ，距離イメージ，結びつきの強さ，父母の位置関係，父母の向き，父母と自己の位置関係，父母軸への向きという指標ごとに結果と考察を行ってきた。これらのことから大学生の家族イメージにおいても，新藤ら[10]が行った小学生の家族イメージと共通するところも多かった。新藤らは，小学生の抱く家族イメージを「父親権威型」「母親権威型」「自己権威型」「父子密着型」「母子密着型」「疎遠型」の６類型に分け，小学生では「父親権威型」が最も一般的な型であると述べている。大学生においても，「父親権威型」が最も多かった。「父親権威型」とは図２に示すように，父親を左，母親を右に，自己は両親を結んだ線よりも下に配置するものである。柴崎ら[9]は大学生における研究において左上は偉い・強いという意味合いがあると思われると述べているが，大学生についても小学生と同じように父親を強いとする家族イメージが平均的なものといえる。これは大学生が抱く理想の家族イメージにおいても同様の結果であった。

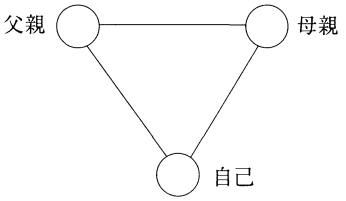

図２　父親権威型の家族イメージ

父親を強いとイメージしていることは，父親のパワーイメージの最頻値が５に対して母親は４，自己は３ということからもわかる。理想の家族のパワーイメージは，現実の家族と最頻値は同じであるが，父親に対しては最も強いパワーを選んだ者が増加し，母親は２番目のパワーを選んだ者が増加している。このことから家族のなかで父親が最もパワーのある家族を望ましいと考えているということがわかる。父親に権威があり，パワーが強い家族をイメージしている者が多いが，

結びつきの強さを合わせて考えるならば，大学生にとっては父親を価値判断の基準としたり，アイデンティティ形成のモデルとするよりは，距離を置いた存在と見ているようである。ただ，本研究の被験者に女子が多かったことも影響しているかもしれない。

つぎに，現実の家族イメージと理想の家族イメージの違いについて考察する。パワーについては，理想の家族と現実の家族を比較すると，父親，母親，自己とも有意差はないものの，理想の家族のほうが増加した。亀口[2)]は，家族のパワーが相対的に強いと認知している大学生の方が，そうでないものよりも抑うつや不安が低かったと述べているが，よりパワーの強い家族を理想としているということは，より健康な家族を望ましいと考えているといえる。

距離イメージについては，理想の家族イメージの方が現実の家族イメージよりも，父母間距離をより短く，母子間距離はより長くなるようイメージされた。また，理想の家族では現実の家族と比べて，父母間の結びつきがより強く，父母が向き合うようイメージされた。これらのことから，家族からの独立の時期にさしかかろうとしている大学生は，父母間の関係がより緊密なものとなっていくことを望んでいるといえるであろう。

家族イメージ法は，臨床場面において心理学的なアセスメント法として用いられるだけでなく，治療にも用いられている。さらに，援助を必要とする家族だけではなく，健康な家族にとっても，それぞれの家族のあり方を振り返り，どのような家族になりたいかという具体的なイメージを提供するものであるといえる。

付記

本研究は，遠矢樹里さんの平成15年度志學館大学卒業論文のデータを研究目的に合わせて分析し直したものである。

注）FIT（家族イメージ法）は，（株）システムパブリカから販売されているが，本研究ではNPO法人システム心理研究所製の研究用のF. I. T. を用いた。

参考・引用文献

(1)　亀口憲治　2000　家族イメージ法　福西勇夫・菊池道子編　心の病の治療と描画法　現代のエスプリ390　至文堂　167-178

(2)　亀口憲治　2003　家族のイメージ　河出書房新社

(3) 亀口憲治　監修　システム心理研究所編　2003　ＦＩＴ（家族イメージ法）マニュアル　システムパブリカ
(4) 亀口憲治　2003　家族療法的カウンセリング　駿河台出版社
(5) 亀口憲治・飯島晶子　2004　ＦＩＴを用いた家族療法　家族心理学年報22　128-141　金子書房
(6) 大下由美・亀口憲治　1999　中学２年生の家族イメージの研究―父，母，子の３者関係イメージ―　家族心理学研究　第13巻　第1号　1-13
(7) 佐伯直子　2002　アセスメントの一つである「家族イメージ法」の有効性について―複数事例からの考察―　日本心理臨床学会第21回大会発表論文集　152
(8) 斎藤環　2003　心理学化する社会　なぜ，トラウマと癒しが求められるのか　ＰＨＰ研究所
(9) 柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治　2001　家族イメージのプロトコル分析と再検査信頼性の分析　家族心理学研究　第15巻　第2号　141-148
(10) 新藤克己・相模健人・田中雄三　2002　小学生の「家族イメージ」に関する研究　家族心理学研究　第16巻　第2号　67-80

［2004年10月１日　原稿受付］